

Title	Matveev, Z. N., Istoriia Dal'nevostochnogo Kraia, 1929
Sub Title	
Author	小島, 武男(Kojima, Takeo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.1 (1932. 3) ,p.142- 143
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蹟や遺物に依つて當時の食料を考察し、原始經濟生活の一斑を示してゐる。

此の他、平竹傳三氏の「オロチイ族の研究」は同種族の人口・物質生活・社會組織・宗教などを知るべき史料で、ロシア語を丹念に翻譯された努力に敬意を表すべきである。最後の定金右源二教授の「イライクの旅」はメンポタミヤの旅行記で該地方の古代文化に對する回顧とその地方の現況とが流暢な文に綴られてゐる。

右は内容の紹介であるが、大家の論文の少ないのが第一冊であるだけに物足りない。また論文集の形式で編輯されてゐるので史料のものが少しく不調和である。然し新進學者の旺盛なる學究的精神が溢れてゐる第二冊第三冊へと期待をつなぐ。以上簡単な紹介を以て發刊の祝辭に代へ、尙ほ將來の發展を祈る次第である。(有賀春雄)

Matveev, Z. N. Istorija Dal'nevostochnogo

Kraia. 1923

本書「極東地方史」は、國立極東大學東洋史學科の教授であるゼ・エヌ・マトヴェフ氏が一昨年のロシア地理學協會ヴラディヴオストツク部の紀要に發表された論文である。

氏は東洋史(主として極東地方)を考古學の見地より研究し、今日迄に公にされし論文には非常に有益なものがあるが、それ等については他日詳しく紹介させて頂くこととして、茲には本論文の内容について少しく述べてみやう。氏は本論を左記の如くに分

けて居る。

一、極東地方史、序論。二、後貝加爾地方に於ける古人種の遺跡。三、極東地方史に關する古文書。四、極東地方小史。五、極東地方の殖民。六、革命當時に於ける極東地方(一九一七—一九二二)。七、重要書目。

以上の項目の内、最初の、極東地方史序論を見ると、最近ロシアに於ける極東考古學の概況を知ることが出来るので、こゝに、その一部分を抄譯してみやう。

『當時この地方に居住して居た人種の頭骨は扁平である、乍然バイカル湖及びそれより北方にかけて發掘される頭骨は長圓形で當時の彼等は金、銀、銅等を使用して居たのである。これについてはエフ・エフ・プッセ氏が十九世紀の後半より極東地方に於ける考古學的材料の蒐集に努力せられ(主としてウスリー地方について)、一八八八年にアムール地方研究學會紀要中に研究論文を發表して居る。その後エル・ア・クラポトチン氏が一九〇八年に同紀要中にプッセ氏より稍々詳細に論じて居り、氏の研究は單にウスリー地方のみならずアムール、サガレンにまで及んで居る。沿海州地方についてはヴェ・カ・アルセニエフ氏が「考古學」(一九一六年)の中で詳細に述べて居る。アムール地方に於て發見された遺物を擧ぐれば、セレムヂ河口及びブラゴヴェシチエンスク附近より數多のものを發見して居る内でパクロフスキー町及びノヴォミカイロフスキー村附近よりは、石器、貨幣等が發掘されて居り、この他青銅の遺物が多く發見されて居る。モスコヴィテイルスキー、トムの兩河岸よりは壘堡壕等

を發見しヌエドマコフ、マルコフ兩村附近より滿洲民族の建設せし都邑を見ることが出來、ヌザヴィト河岸よりは古墳を發見して居る。沿海州及びサガレン地方に於て發見されたる遺跡、遺物には、ニコリスクウスリー地方ビキン河沿岸附近にある舊都よりは、壕を有する土砦を發見し、スーチャン、ホール河岸には穴居民族の棲息せしことを證する洞窟がある。尙ボシエト灣岸よりは厨房貝(主として介殼にて作りしもの)が多く發見されて居る。以上のことについてはヴェ・カ・アルセニエフ氏が紀要に發表して居る論文を參考とすべきである。尙この附近には往昔の道路が處々にあり交通史上貴重な材料とされて居る。貝加爾湖附近には舊邑、土砦等があり、その内最も興味あるものは、ニコドウニスキーの廢址であり、加之附近に洞窟等も發見されてゐる。又セレンガ、チロイ、アムール、アルグナの諸河岸よりは石材を用ひた古墳が發見され、坐棺、寢棺組があり、附近の碑石の記銘により石器時代の狩人の生活の一部を窺ふことが出來、尙碑石のあるものには古トルコ文字が記されて居る等史材としても可成り貴重なものがある。」

尙、氏は極東古錢學等についても、詳細に述べて居るが、あまり長くなるので、この位にしてをく。要するに氏は本文に於て、史籍の缺けて居るところは、考古學により、以て完全なる極東地方史を編した譯である。只、筆者の欲を言はせれば、殖民の項に於て、先住土着民、古住ロシア人について今少しく詳しく知りたかつたことである。(小島武男)

Matveev, Z. N. Sostoianie bibliographi-
cheskoi literatury Dal'ne-Vostochnogo
Kraja. 1926

本書「極東地方文獻目錄編纂」は、矢張り上述のゼ・エヌ・マトヴェフ氏の著である。小冊子であつて、又決して新しいものではないが、記載してある文獻は何れも極東研究(人文科學的に)志す士にとつては、見逃し得ざる貴重な文獻のみを厳選してあることで、極東研究と切離すことの出來ないものであるといつても敢て過言ではあるまい。

元來極東地方を研究した論文、報告書等(ロシアに於て出版されたもののみ)を計へて見ると一萬有餘に達するのである。が、その内、何れが重要なものであるかといふことを知ることは決して容易なことではないのである。氏は本書に依つて、以上の不便を除くために、特に自己の専門的立場より、數多き内より是非必要な文獻を選択して編したのが本書である。内容は各著者がアルファベット順に排列されて居り、主要なものには、簡單ながら解説が付してある。只、欲を言へば、これを更に分類によつて排列してもらいたかつたことである。

文獻のことを書いた序でに、ロシアに於ける、極東地方に關する文獻編纂の過程を少しく書いてみやう。

ロシアに於ける最初の極東地方文獻目錄とも稱し得べきものは、一八八二年にエフ・エフ・ブッセ氏が著した「アムール地方の文獻」である。本書は千四百十七の論文、報告、地圖及び公文書等